

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：15401

研究種目：奨励研究

研究期間：2020～2020

課題番号：20H00679

研究課題名 読書活動に結びつく高校国語科授業のあり方と書く力の向上との関連についての探求

研究代表者

三根 直美 (Mine, Naomi)

広島大学・附属高等学校・教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 480,000 円

研究成果の概要： 高2対象クラス40人では50%が1月0冊の不読の傾向にあった上、学校の図書室も1年に1回も利用しない生徒は47%もいた。新書を教室に置いたり、授業で書く活動を組み入れ、11月と1月に実施した意見文2つを構成・根拠・主張の3観点のルーブリック評価に従って採点し、データ分析をした。

実施時期による有意な差は見られなかったが、3観点の評価とも向上した生徒は高い読解力を有し、評価を上げようと意欲的だったり、枠を与えなくても自分の意見が述べられた。観点の評価が低下した生徒は読解力が少し不足しており、枠を与えた方が書き易い、独善的意見になる傾向があった。生徒実態に応じた指導が書く力の向上には必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

対象人数は1クラスと少ないものの、高校2年の読書実態における1年間の変化を探り、高校生の多忙さ、なぜ不読なのか、学校の図書室利用をしない理由がはっきりした点と、読書の時間が取れない場合、学校で質のよい文章を読ませる試みをしたり、読書を促す課題を出した結果、ルーブリック評価のデータ分析により、書く力がある生徒、劣っている生徒の傾向がわかった点は大きいだろう。

また、従来ある作文のルーブリック評価は煩雑なものが多いが、構成・根拠・主張の3観点到絞ったルーブリック評価だと、つける教員にとっても簡潔であり、それはすぐ返却できることにも繋がり、生徒の意欲を増すものとなる点で新しい提案と言える。

研究分野：国語教育

キーワード：書く力 読書活動 読解力

1. 研究の目的

読書の有用性がよく言われている昨今、小・中学生と比べて高校生の不読率はかなり高い状況にある。学校生活や課外活動に忙しい高校生に対して、家での読書を勧めるだけでは不読率を下げることは結びつかない。不読率改善のためには、学校の授業での取り組みが突破口になるはずだと考えた。また勤務校における学校図書館でも一年間に一冊も借りたことがない生徒が 65%もいる実態がある上、貸出し数の多い生徒も好きな作家やジャンルが固定している傾向にあった。大学入学共通テストにおける記述問題の導入や実の場における複数の資料の読解などが必要とされる昨今、読書経験が少ない状況では書く力の向上など望めない。そこで本研究では、通常の国語科の授業内容を読書活動に結び付け、書く力を向上させる方法を探ったものである。

2. 研究成果

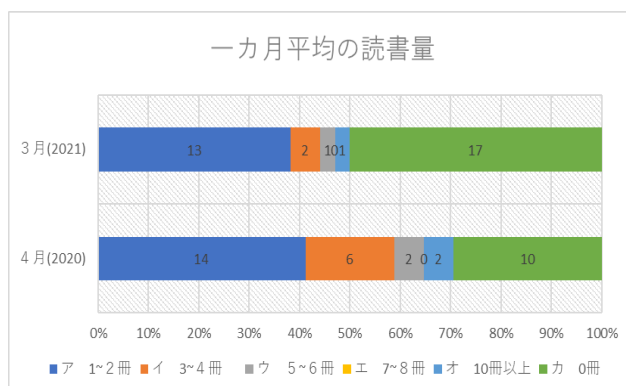
研究の方法としては、(1) 広島大学附属高等学校 2 年生 40 名を対象に、2020 年 4 月と 2021 年 3 月の 2 回、読書実態に関するアンケートを行う。(2) 一年間で、以下の五つの書く活動を実施した。

- ① 教室に常設してある新書の読書案内文を書く (B5 1 枚)
 - ② 「ネット上の悪質な投稿による被害をなくすために」というタイトルで意見文を書く (600 字)
 - ③ 読書感想文 (夏休み課題) (2000 字以内)
 - ④ 『「である」ことと「する」こと』 (丸山真男) の授業実施後、筆者の論理を使って身近な問題について意見文を書く (800 字)
 - ⑤ 指定した岩波新書 2 冊のどちらかを選び、本の内容をまとめた上で意見を書く (A4 用紙裏表・冬休み課題)
- ④と⑤の意見文の評価には共通のルーブリック評価 (表 1) を用い、ルーブリック基準に従って A 評価 (=10 点)、B 評価 (=6 点)、C 評価 (=4 点) として採点を行った。また、内容についても、いくつかを取り上げて分析した。

表 1 ルーブリック評価

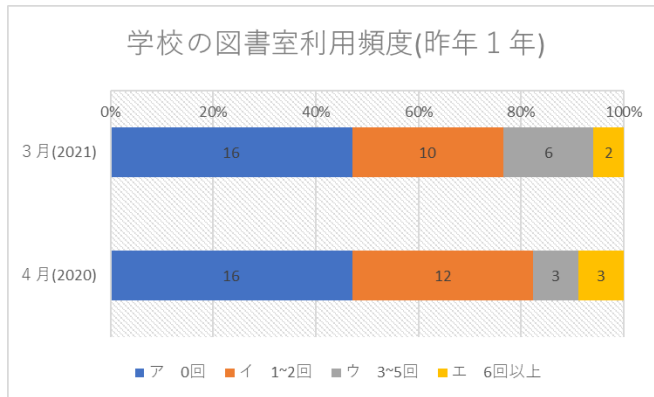
	A (10 点)	B (6 点)	C (4 点)
構成	資料の主張が的確にまとめられており、自分の考えも的確に配置されている。	資料の主張は取り上げられており、自分の感想も配置されている。	資料の主張は一部分だけが取り上げられていて、自分の感想が連ねられている。
根拠	社会問題に対する自分の意識や知識、情報やデータなどが、明確に根拠として取り上げられている。	自分の意識や知識などを少しは取り上げている。	自分のもっているイメージや感覚だけをもとに、書きなぐっている。
主張	主張が明確で、根拠がはっきりして説得力がある。	主張があまり明確でない。個人の感想に近い。	主張が全くない。筆者の考えをなぞっているだけである。

ルーブリック評価を構成、根拠、主張の三つにしたのは、「表記」の項目を設ける必要性がないほど初歩的な部分の直しが少なかったことと、できるだけ単純・明快な方が生徒に評価の観点伝わる上、教員側も評価する時間がかからないという考えからである。



- (1) の結果、実態調査のうち欠損のない 34 名のデータから 1 か月平均の読書量は、2020 年 4 月と 2021 年 3 月で大きく変化したのは、0 冊の不読層である。部活や体育祭準備、塾などの活動のためか、30%から 50%に増加している。1~2 冊の層に変化はないが、3~4 冊の層が減少している。このことから、学校 2 年生は中心学年であり、様々なことで忙しく、読書をする時間が取れなくなると言えよう。ただ、

2020 年は新型コロナウイルスによる 4 月・5 月の休校があり、以前よりずいぶん本を読むようになった、少しは読むようになったと答えた生徒が 26.4%いたことも、高校生



の時間のなさを表していると言えるだろう。

また、学校の図書室利用についても、47%が一度も借りていない状態に変化はなかった。2020年4月よりも2021年3月の方が3~5回借りる生徒がわずかだが増加しているのは、公民の授業で課題としてレポートが課されていたり、コロナ禍の影響などがあるかもしれない。

図書室を利用しない理由で多かったのは、行くのが面倒、利用する習慣がないことだったので、新書を教室に置いたり、授業の課題として利用を促

す方略はうまく働いたはずである。

(2)の結果としては、④『「である」ことと「する」こと』(丸山真男)の論理を使った意見文は2020年11月実施、⑤貧困を作ったならばテーマとした岩波新書を読んだ意見文は2021年1月実施である。④⑤のルーブリック評価の平均値と標準偏差は表2に示した通りである。得られた得点の内データに欠損の見られない30名を対象とし、実践時期の前後で得点の向上がみられるかについて、対応のあるt検定を用いて比較を行った。その結果、ルーブリックにおける「構成」「根拠」「主張」の3観点のいずれにも実践時期による有意な差は見られなかった。

表2 各実践の平均値と標準偏差		
	意見文平均値	新書平均値
構成	6.60 (1.43)	6.73 (1.78)
根拠	6.83 (1.21)	7.20 (1.94)
主張	6.93 (1.23)	7.13 (1.72)

一方、実践時期の前後での個々のルーブリック評価の変化を見ると、「構成」ではルーブリック評価の向上がみられた者が7名、変わらなかった者が15名、低下した者が8名となった。同様に「根拠」では上昇が8名、変化なしが16名、低下が6名となり、「主張」では上昇が8名、変化なしが17名、低下が5名という結果が得られた。

数値上に有意な変化は見られなかったものの、実践時期の前後の平均値はいずれも6.5点以上となっており、ルーブリック評価の変化が見られなかった者が約半数を占めている。これらはある程度の文章表現力を今回の実践の対象者が有していたとも考えられる。一方で、ルーブリック評価が上昇した者を個別に見ると、3観点とも上昇した者4名のうち3名は、現代文の成績が5であることから高い読解力を持ち合わせている上、枠を与えない方が主張のある文章を書けるということと、前回のルーブリック評価より上げようという意欲が高かったのではないかと考えられる。また、3観点の内3つ、2つが低下した生徒5名については、現代文の成績も3か4であり、読解力の点でも高いとは言えず、その場合授業で読解を終えた後に枠を与えて書いた意見文の方が書き易かったと判断できる。また、考え方に独りよがりの傾向があり、根拠、主張の点数が低くなっている傾向が強かったと推測される。

提案として、

(1) 読書実態のアンケートより、高校生を取り巻く多忙さは、読書へ向かわせにくい現状がある。その中でも読書量がもともと少なかったり、一年間で減少する傾向にあった生徒でも、新書を教室に置いたり、冬休みの宿題として新書を読ませたことにより、意見文を書く上で社会への目を持たせられた点で効果があったと考えられる。読書量がたとえ少なくても、新書などを糸口として質のよい内容のある読書を多くの教科で促していくことが、これからの高校生への指導として適切であると考えられる。

(2) 生徒の実態に合わせて対応していく指導、具体的には読解力がある生徒に対しては、特に枠を与えない意見文を書かせる、ルーブリック評価を毎回与えて意欲やモチベーションを持たせていくことが必要である。また、読解力が不十分な生徒に対しては、枠を与えて意見文を書かせたり、書く内容について事前に生徒同士で話し合っておいたり、ルーブリック評価の中で主張に説得力をもたせるには具体的な根拠が大切であることを伝え、相手意識を持った文章を書く指導を組み入れることが大切だと言える。

また、評価が高かった生徒の文章の特徴としては、接続詞がうまく使用されていることと、構成がしっかりしていたことがわかったので、授業の中で、接続詞や文章構成を取り立てて扱うことを行う必要がある。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 三根 直美	4. 巻 第67号
2. 論文標題 「論理国語」における言語活動を取り入れた授業提案ー『「である」ことと「する」こと』（丸山真男）の場合ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中等教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 91～102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ー

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

ー

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------